

らぶ☆ダイエット2

目次

らぶ☆ダイエット	5
らぶ☆ダイエット チーフ編	133

らぶ☆ダイエット2

『わたし、細井千夜子は二十キロのダイエットに成功しました!』

それだけ聞くと『すごい!』と思うかもしれない。でもそれは元々太っていたから、普通の人より体重の落ちるペースが速かったただけのこと。実際はおでぶから標準体重になれただけで……悲しいかな、まだまだ見た目のぼっちゃり感が否めない。

太っていた時はまったく自分に自信がなく、恋愛にも縁がないまま二十六年過ごしてきた。このままではダメ、変わりたいとダイエットに挑戦しても、いつも失敗に終わってばかり。そんなわたしがダイエットに見事成功できたのは『悔しかった』から……。同僚や後輩の女子社員に馬鹿にされ、おまけに片想いしていた人まで『もう少し痩せたほうがいい』と話しているのを聞いてしまった。その悔しさをバネにして、わたしはかなりの覚悟でダイエットをはじめたのだ。

低糖質高タンパク中心の食事療法やトレーニング、それから漢方系の滋養強壯剤の摂取も効果があった。ダイエットは本当に辛くて大変だったけど、それでもわたしが頑張れたのは一緒にトレーニングしてくれる人がいたから……。彼が手伝ってくれなかったら、今頃きつと何度も挫折して、恐ろしいリバウンドを繰り返していたに違いない。——手伝ってくれたのは当時の上司で、チーフこと榎澤恭一郎さん。バツイチだけど、尊敬できる素敵な人だ。

彼も昔は太っていて、ダイエットの経験者だそう。ダイエットをはじめてすぐに無理な食事制限でぶっ倒れたわたしを見兼ねて『一緒にトレーニングしてやる』と言ってくれた。ただ体重を落とすだけでは健康な身体が維持できない。運動して筋肉をつけることが必要だと、毎朝一緒に走ったりジムで泳いだりするのも付き合ってくれた。

しかも彼は、あまりにも自分に自信がなくて好きな人に想いを伝えることもできないわたしに、恋愛のトレーニングまでしてやると言い出した。

そのおかげか、いつもは続かない運動も彼と一緒に続けられたし、食事も彼と一緒にだとドキドキしてすぐに満腹になる。ときめくことで食欲を抑えられたし、彼に触られることで、わたしの身体はどんどん変わっていった。すごくいいホルモンが分泌されているのか、体調も肌の調子もよくなった。ダイエットに成功した一番の秘訣は、それだったのかもしれない。

そんなわけで見事、おでぶから標準体重のぼっちゃりさんになることができたわたし。

だけどそんな時間を共有するうちに、わたしは彼のことが好きになってしまった……

当時のわたしは、彼には結婚間近の相手がいると思ひ込んでおり、それでも諦めきれずに彼に抱かれて……。その時はすごく辛かったけれど、後悔なんてしていない。それだけで幸せだったから。だけど結局、彼にはそんな相手はおらず、互いに想い合っていたことが判明。ようやく本当の恋人同士になれて、あつという間に結婚することになったけど……

——わたし、こんなに幸せでいいのかな?

1 怒涛のお引越し

互いの想いが通じ合い、身も心も愛された後、性急に話が進んでいった。

チーフ、じゃなくて恭一郎さんは、月曜の仕事の後にアパートまで送ってくれて、すぐにでも荷物をまとめると言い出したのだ。どうやら自分のマンションにわたしを連れて戻る気らしかった。「えっと、どのぐらいの日数ですか？」

平日も彼のマンションに泊まるとなると、その日数分の着替えが必要だ。まさか何日も続けて同じ服を着て会社に行くわけにはいかない。

「この先ずっとの分になるな。ここは引き払って、俺のマンションで一緒に住むんだから。どうだ、どのぐらいで用意できそうだ？」

そんな、すぐにはまとめられないよ。なにもかもあつという間に決められては、ついていけない。とりあえず生理が来てしまったので、このまま自分のアパートで休ませて欲しいとお願ひした。

「身体が辛いのか？ それなら無理せずゆっくりでいいから、荷物をまとめておいてくれ。俺も自分のマンションを片付けておくよ」

「あの、本当に引越すんですか」

同棲するの？ 結婚前提だつてわかつてるけれど、どうしてもそこに引つかかってしまう。うち

の親つて案外、そういうところは厳しいんだけど。

「このアパートを引き払うのは、千夜子の両親の許可をもらってからにするつもりだ」

そう言われて少しだけホッとした。

「古い物や不要な物は処分できるよう仕分けておけよ。ああ、それと新婚生活を送るんだから、家具や電化製品、調理器具に食器なんかは新しく買い揃えような」

「えっ……あの、新婚生活つて？」

「ああ、ふたりで住むんだからそうなるだろ？ 俺としてはできるだけ早く籍だけでも入れたいが、順番にこだわるなら式を挙げてからでもいい。いずれにせよ今週末には俺のマンションに引越してこいよ」

「ええっ、そんな急に？」

すぐにでも一緒に住みたいようなことは聞いてたけど、もう少し先だと思ってた。

「おまえの実家への挨拶も早めに済ませておこう。来週では驚かれるかもしれないから、再来週の土曜がいいな。ご両親には午後から行くと連絡を取っておいてくれ。その翌日の日曜は俺の実家に連れて行くから」

そんなこといつ決めたのかと聞いたら、えっちしてる最中だつて。呆れてものも言えなかった。どうしてそういう大事なこと、わたしの意識が飛んでる時に決めるかなあ。だけど楽しそうにこれからの計画を語る彼を見ていたら文句が言えなくて……母に連絡を取ると、めちやくちや驚かれたけど、再来週の予定はすんなり決定した。

その日、わたしは久しぶりに自分のアパートに戻り、それから週末まで片付けに没頭した。持ち物の中には、見られたくないものもあるわけで……彼だってそういうものがあるはずだ。うちのお兄ちゃんは隠してたえつちな本とかDVDをお母さんに見つかったことがあったけど、まさか……恭一郎さんはそんなの持っていないよね？

わたしは結構なんでも取っておくほうだから、荷物をまとめるのには本当に苦労した。このアパートは狭いから、できるだけ荷物を増やさないようにしていたつもりだったけど、いつの間にか増えちゃってる。

ただ着る物は瘦せた時に整理していたので大変じゃなかった。サイズが変わっても着回せるコートやジャケットは取ってあるけど、スーツもフォーマルウェアもブカブカだったから。

金曜の夜は恭一郎さんもわたしのアパートへ来て、移動する荷物をチェックしてそのまま泊まっていた。夜は久々に彼の腕の中で眠る。この四日間、眠る時どれほど寂しかったことか。生理が終わったばかりなので優しく抱いてくれたけど、それでは物足りなくなっている自分がいた。ヤだな、いつの間にかすごく欲張りになっている。そう思っている、わたしのアパートの壁は薄いので大きな声は出せないし、あまりすごいことはできないけど……

翌日の土曜は早朝から荷物の移動。わたしが彼のマンションで片付けている間に、彼は車でわたしのアパートとの間を何度も往復して他の荷物を運んでくれた。

彼はわたしのために、マンシヨンのウォークインクローゼットを半分以上空けてくれていたけど、

持ってきた服が少なかったから全部詰めてもガラガラの状態だった。

恭一郎さんの服は半分以上がスーツとシャツで、普段着はそう多くなかった。どうやらいものを大事に着るタイプのようだ。ちらつと見たらそこそこのブランドの物ばかりだった。彼の隣に並ぶ者として、わたしはこれからどんな服を揃えればいいのか……そもそも、どんな服が今の自分に合うのかさえ、まるで見当もつかない。今までは体型という制約があったため選択肢が少なくて悩む必要もなかったから、これって贅沢な悩みだね？ もっとも、わたしは身長が一六九センチで、標準体重になったとしても九号やMサイズは無理だから、選び放題ってわけでもないけれど、それでも、これからスタイルのいい彼の隣に立つのなら、もう少し釣り合う格好をしたかった。

その日の夜は、さすがにわたしも彼も疲れ果ててクタクタで。お風呂に入ったところまでは記憶があるけれど、わたしと交代でお風呂に入った恭一郎さんがベッドに戻ってきたのにも気が付かないほど、ぐっすりと眠っていた。どうやら彼は、それが気に入らなかったらしく、報復は翌朝……寝ぼけてる間に色々されてしまった。そのまま延々とベッドで過ごしたような雰囲気だったけど、今すぐ必要な物もたくさんあるので、わたしはどうしても今日中に買い物を済ませたかった。だから一回終わったところで無理矢理彼を引き剥がしてベッドから抜け出したのだ。

すると今度は恭一郎さんが、買い物の帰りにわたしのイトコで幼馴染でもあるコータの店に連れて行けと言いつ出した。どうやらわたしが以前好意を持っていた、ダイエツトするきつかけにもなった同僚の本城さんを、店に連れて行ったことがあるのを気にしていたみたい。

『本城は連れて行ったんだよね？ 彼氏として。それなのに俺はダメだとは言わせない』

そう言つて強制連行されてしまった。

お店にはわたしのもう一人の幼馴染で親友のイッコもいた。コータの彼女でもあるイッコはしょっちゅうこの店に来てるので、たぶん会えるだろうなとは思つてたけど。久々に話ができて嬉しかった。それはそれでよかったんだけど……しばらくして、目の色を変えた恭一郎さんが、突然『帰ろう』と言ひ出した。どうやらコータの奴が、以前わたしに告白したことを話したらしい。あれつて結局、わたしが急に離れていきそうになった時、焦つたコータが勝手に恋愛感情と勘違いしただけなのに。イッコのことが好きなのを認めたくなくて言ひ出したに過ぎない。

それにしても恭一郎さんの『帰つたら、覚悟してもらおう』なんて台詞が怖すぎる。なにもなかったと言つても信じてくれない。

「信じてるさ。けど、それとこれとは別だ」

「なにが別なのよ！ やだっ、んんっ」

コータの店の隣にある駐車場の車の中。言い訳もすべてキスで塞がれてしまう。

「だって……あれは勘違いみたいなもので……んっ、ここじゃ、いやっ」

わたしが抵抗するものだから、いったんは車を出しマンションまで戻つたけれど……彼の熱情はキスだけでは済まず、マンションの駐車場でもわたしを弄んだ。

「千夜子っ」

「んんっ……やあ……ダメ」

ようやく部屋に辿り着いて玄関に入った途端、壁に押しつけられた。そうして立つたまま彼のモ

ノを宛がわれ……わたしは抵抗なく受け入れてしまふ。

車の中で焦らすようなキスと愛撫を散々繰り返されていたので、わたしのカラダは彼の存在を喜んだ。激しく突き上げられ、わたしは声を抑えるのに必死だった。

「今日は着けずにするぞ……くっ」

生理が終わつたばかりだとしても、妊娠する可能性はある。なのに彼はそのままわたしに熱情を吐き出そうとした。加速した彼の腰使いに翻弄されて、わたしは耐え切れずに何度も嬌声を漏らしてしまひ……

「ひっ……ひいっ」

いきなり快感の頂点まで押し上げられたわたしは、呼吸を荒らげて必死に肩で息をした。

「ああ……やあっ」

彼がわたしの中から抜け出る時、注がれた熱いモノが内腿を伝い落ちてくる。その感覚に耐え切れず、わたしは玄関先に座り込んでしまうのだった。

「もう……酷い」

「すまん、無茶をした」

前週と同じように、彼はわたしを抱きかかえてバスルームへ運んだ。そしてお湯をためながらふたりしてシャワーを浴びる。

「きれいにしてやる」

やさしい……と感じたのは、ほんの一瞬だった。

「やつ……うそ、つきい……」

そんなの口ばかりで、結局バスルームでも彼にカラダの内側から掻き乱された。

「いつからそんなに上手になった？ 俺の上で、これほどカラダをくねらせて」

「だって……あつん。ダメ、下から……突き上げないでえ」

浴槽に入ってから、彼の上に乗せられたままパチャパチャと揺さぶられる。いつものベッドの上とは違い、重力に囚われないわたしのカラダ。彼の上で反り返り、絶頂に震えながらふたたび彼の愛を受け取った。

「もう、ダメ……クラクラする」

「悪い、のぼせさせたか？」

お風呂から上がった彼は、今度こそ本当にやさしかった。ぐったりしているわたしにお揃いで買ったバスローブを着せ、冷たい飲み物と大好きなフルーツゼリーを用意してくれる。そして、ソファの前に敷いてあるラグの上にわたしを座らせて、彼はソファに座りうしろからわたしの髪をドライヤーで乾かしてくれた。

「どうだ？ 少しは楽になったか？」

「恭一郎さんって、激しくした後はいつも以上にやさしいんだ」

「な、なにを言い出すんだ……まったく。自分でやるか？」

「ううん、もう少しお願いします」

わたしは彼の足に身を預け、ドライヤーの音を聞きながらまどろみかけていた。

「ゼリーは食べないのか？」

「忘れてた……いただきます」

ジュレタイプのピーチゼリーを口に含もうとする。だけど髪を乾かしてもらっているので顔を動かせず、必死で口にスプーンを近付けるけど……

「ひゃっ……もう、零しちゃった」

ゼリーはつるりと首筋を這い、胸元へと忍び込もうとする。

「仕方ないな」

どこが仕方ないのか……彼はドライヤーを足元に置くと、わたしを引き上げて向かい合わせに座らせた。そしてわたしの胸元へ入り込んだゼリーを探して、唇をバスローブの中へと忍ばせる。バスローブだけだったのが、よくなかった。

「んっ……あっ」

前の合わせは簡単にはだけてしまい、ゼリーを舐め取った後も彼の唇は素肌を這い、胸のあたりに吸い付く。それだけで、もどかしさを感じてしまうほど、わたしは慣らされていた。

「やつ、もう？」

隆起した彼自身がバスローブの合わせ目からわたしを求め擦り上げてくる。

「おまえ相手だと際限ないな、俺は」

すでに濡れていたソコはすぐに彼を受け入れ、自分の重みで彼を奥まで感じてしまうのだ。

「んっ、深い……」

「さつきよりもか？　すぐわかるぞ、俺も……堪らん」
「さつきみたいにして……ゆっくり、して」

「ああ、イキずぎておかしくなるのが怖いんだろ？」

「違うの……こっちのほうが愛されてるなって思えるから」

こうして向かい合って抱きしめられたまま繋がるのは気持ちいいだけでなく、お互いの肌のぬくもりが感じられて嬉しかった。それに、彼の顔を見ていられる。気持ちよさそうにしたり、すごく辛そうに耐えていたり……わたしがそうさせてるのかと思えば思うほど、嬉しくて堪らなくて彼を締め付けてしまう。

「そんな可愛いことを言ってくれるな。出したくなるだろ？」

「やつ……まだ、イヤっ」

自分でもわかるくらい、キュッとソコが収縮する。

「言ってることやってることが真逆だぞ？」

「だって……自分でやろうと思ってるんじやないもの」

彼の表情や言葉に反応してしまうのだからしょうがない。

「千夜子、愛してる」

「あっ」

また無意識に彼の言葉に反応してしまう。

「おまえは？」

「わたし……も」

——そのあたりまでは記憶がはっきりしていた。

だけどその後、彼の紡ぐ言葉に過剰反応してしまうわたしを、彼が繋がったまま抱きかかえてベッドまで歩き出したあたりからの記憶は曖昧だ。

ドロドロのグチャグチャになって彼に激しく攻められ、何度もたて続けにイッてしまう。そしてシートに突っ伏して激しくカラダを痙攣させた。赦しを請うても赦されず、彼が果てるまで攻め続けられたのだった。

翌朝……どう頑張っても身体が動かず、なんとか起き上がって仕事に行こうとしたけれど彼に止められた。

「頼むから今日だけは休んでくれ」

「でも……わたし無断欠勤なんてしたことないのに」

「俺から経理部長に話しておくから。引越しの準備で疲れが出たことも、結婚の話もな」

「えっ？　恭一郎さんからわたしの上司に結婚の報告しちゃうんですか？」

「うちの営業部長と専務にも結婚の話が進んでいると話しておくが、それじゃ不服なのか？」

「そうじゃなくて……」

できれば一緒に並んで報告したかったのに……。以前は彼と同じ営業にいたけれど、わたしは今経理部に異動している。いずれ両方の部長に挨拶しなければならないのはわかっていたけれど、ま

さかこんな形で済まされてしまうなんて……そのことが少しだけ寂しかった。

「とにかく今日は安静にしている」

そう言っただけで会社に行ってしまった。その後ぐっすり眠ったけど、身体がだるくて動く気になれなくて……昼過ぎに彼が用意してくれたいたサンドイッチを食べて、それからなんとか動き出して昨日の片付けの続きをした。買ってきた品物がそのまま置きっぱなしだったから。

その夜、体重を量ったら一キロ痩せていた。

このままずっと彼に抱かれ続けていたら減るかも？　なんてね。

ここところ忙しくて、食事も前のようなダイエットメニューは作れていない。朝のジョギングも前夜の疲れが出たり朝に手を出されたりして起き上がれず行けずじまい。彼はひとりで行っていた。平日は仕事から帰ると片付けの続きと夕飯の支度（しだ）に追われ、週末も片付けが残っているからジムにも行けそうにない。

愛され、充実している反面、運動もダイエットメニュー作りもしないだらだらとした日が続いていた。

2 愛のリバウンド？

週末の土曜。今日は午後から、うちの両親に挨拶（あいさつ）に行く約束していた。

なのに昨夜もやはり明け方近くまで抱かれてしまい、自分でもわかるくらい疲れ果てていた。け

れども、約束していたので出かけるしかない。

いつもと同じように朝から元気にジョギングに向かう彼を見ていると羨（うらや）ましかったけど、わたしにはそこまでの体力はない。朝風呂をして無理矢理目を覚まし、約束の時間までに出かける準備をするのが精一杯だった。

「えっ……あなた、本当に千夜子なの？　ずいぶん痩せたわね……身体は大丈夫なの？」

久々に実家に帰ったわたしに、母は驚いた様子で声をかけてきた。

「大丈夫だって。その話はまたあとでね。えっと、こちら榎澤恭一郎さんです」

母はお喋（しゃべ）り好きで話しはじめると長いので、話を切る。まさか恭一郎さんをほったらかしにしたまま、玄関先で話し込むわけにはいかないものね。

彼を紹介していると、両親と同居している兄夫婦もちやっかり覗（のぞ）きに來ていた。

「初めまして、千夜子の母です。さあさ、どうぞどうぞ」

「初めまして、榎澤恭一郎です。すみません、お邪魔します」

どうやら彼は緊張しているようだけど、営業スマイルが完璧でありそう見えない。

「それにしてもおまえ……えらい男前を連れてきたなあ。なんか、彼の弱みでも握ってるのか？」

「なによ、おにーちゃん。ずいぶん酷（ひど）い言い方ね。それが可愛い妹に言う台詞（せりふ）？」

「可愛げがあったことなんてねえだろ。今まで男っ気ゼロで、彼氏のかの字もなかったのに、いきなり連れてくるのがこのレベルじゃ普通そう思うだろ？」

「いえ、お義兄さん。どちらかというと私が無理を言ったほうです」

「お義兄さんって……」

兄は彼より二歳下な上、恭一郎さんは落ち着いているので実年齢よりも上に見られやすい。そんな相手にお義兄さんと呼ばれ、兄は呆然^{ぼうぜん}としていた。さすがに恭一郎さんに軽口は叩けないらしい。応接間に通された恭一郎さんは、両親を前にして例の『お嬢さんをください』というのをやってくれた。イマドキそういうのってどうかなって思うんだけど、普通に『結婚します』じゃ両親は納得しないものらしい。兄も奥さんの実家でやったと言っていた。

「お聞きになっているかと思いますが、私は過去に結婚して半年で別れたバツイチ男です。ご両親にしてみれば納得がいかなぬ相手でしょうが、どうかお赦^{ゆる}しいいただきたい」

バツイチだということは、事前にわたしからも両親に話していた。

「このご時世^{じせい}、こだわつてもしょうがないことでしょう。子供はいらっしゃらないそうなので、それだけは安心しています。娘にいらぬ苦勞をさせたくないというのは親心ですからね」

「寛大なご配慮^{はいりょ}、ありがとうございます」

「むしろ、うちの娘でいいのですか？ 今は痩^やせているが元々太つとる子だ。元の姿に戻ったからと返品されても困ります。太つてようが痩^やせてようが、千夜子は私どもにとって可愛い娘に違いないので、そういう理由での返品は受け付けかねます」

大概酷いことを言われていると思うけど、どうやら父は先手を打っておくつもりだったようだ。太つたままでは一生結婚できないのではと心配していたため、どんな人を連れて来ても祝福しようと思っていたらしいけど、わたしは痩^やせて帰ってきたものだから、今度はそっちが心配になったみたい。

たい。

「千夜子さんが痩^やせたから好きになったわけじゃありません。彼女の中身ごと好きになりました。どんな姿になつても愛し続ける自信があります。もう二度と結婚なんてするまいと考えていた私に、生涯共に生きたいと思わせたくれたのが千夜子さんなのです。一生手放すつもりはありません」

あまりにも堂々としたその答えに父と兄は驚き、母と兄嫁は頬^ほを赤らめて彼を見つめていた。普段から臆面^{おくめん}もなくそういうことを言う人だけど、家族の前で言われるのはかなり恥ずかしい。

「それを聞いて安心したよ」

父はそう言って彼に食事と酒を勧めた^{すす}。わたしは恭一郎さんの運転する車で来ているからと止めたけど、彼は断りきれずに吞んでしまった。結局その日は実家に泊まることになり、和室の客間に布団を並べられた。

兄の結婚が決まってひとり暮らしをはじめた時、わたしの部屋を明け渡して出たので、実家にはもう自室はなかった。だから余計に帰りにくくなったただけだね。

「ダメつてば……もう」

夜、わたしがお風呂から上がつて客間に戻ると、先に済ませていた恭一郎さんに速攻で布団の上を押し倒された。

うちの両親も、結婚すると決まっているとはいえ、未婚の娘を男と同じ部屋に並べて寝かせるなんて、いいのかなって思うけど。兄嫁も結婚する前から兄の部屋に泊まっていたので、そのあたり

は鷹揚^{おうちやう}なのかもしれない。

「布団なんて社員旅行以来だろ？　なんだか新鮮でな……」

ニヤニヤと笑いながらわたしに覆^{おほ}いかぶさりキスを仕掛けてくる。いったんキスがはじまると、わたしが逃げられないってわかっていてやってるんだから、もう！

「この部屋には鍵とかないから、ダメだって……んんっ」

そのままなし崩しにされると思ったけれど、彼はわたしからすつと離れて自分の布団に入ってしまう。

「えっ……あの」

「さすがにご両親の近くで最後までではできないからな」

でも、とわたしは口籠^{くちども}る。それじゃ寂しいと思ってしまう自分がいた。

「どうした？　キスでその気になったのか？」

「そうじゃないけど……少しだけ恭一郎さんの側に行ってもいいですか？」

おいおいと呆^{あき}れながらも腕枕をしてくれる、その胸の中へ潜^{もぐ}り込む。そして糊^{のり}のきいた来客用のシーツの冷たさから逃れるように、脚を絡めて擦^すり寄った。温もりはあるのに愛し合えないと思うと少しだけ切なくなってしまう。

「もう、ひとりで眠るのは寂しくて……無理です」

「そんな可愛いこと言うな」

手を出したくなる。そう耳元で囁^{ささ}かれた後で強く抱きしめられた。そして背中に戻された手が下

におりてきて、穿^はいていたジャージの中に忍び込んできた。パジャマ代わりにふたりが着ているジャージの上下は、いつも車に積^たみであるスポーツバッグに入れていたものだ。

「意地悪……」

「それはこっちの台詞^{せりふ}だ。こうされるとわかってて、こっちに來たんだろ？」

何度か啄^{くは}むようにキスした後、今度は彼の舌が入り込んでくる。

「んんっ」

ダメ、これ以上してたら……止まらなくなる。彼だってわかっているだろうに、彼の手は上着の裾^{すそ}から入り込んで背中^{りようせん}の稜線^{りようせん}をなぞっていく。それだけでゾクゾクした快感がカラダを駆け抜けていった。理性と欲望がせめぎ合う。

わたしのお腹のあたりに押し付けられた彼の下腹部は、すでに熱く滾^{たぎ}りはじめている。

「あっ……ん、恭一郎さん」

彼の指が下着の中に入り込んで、くちゅりと濡れた秘所を搔^かき回す。もう、ダメ……これ以上できないのに、どうするつもり？

「我慢できないって顔してるぞ、千夜子」

そんなことはないと言いたかった。だけど彼の手が胸を捏^こね、尖^{とが}った胸の先をきつくつまみ上げてくるので、おもわず『ひっ』と部屋に響くような声を上げてしまう。

「しっ、これでも囁^{ささ}んで声を我慢するんだ。おまえだけでも楽にしてやるから」

仰向けにされ、彼が視界から消える。そうして、まくり上げた自分のジャージの裾^{すそ}を口^{あて}に宛^{あて}がわ

れるのと同時に、痛いほど敏感に尖った胸の先に吸い付かれた。

「んぐっ」

必死で声を堪えても我慢できなくなる。それなのに彼は胸の先を虐めることをやめてくれない。さらにジャージのズボンに手を差し込んでくる。そして下着の横から入り込んだ指先が、敏感な突起を擦り上げ、濡れた秘裂を掻き回しはじめるのだ。

「んんっ！」

感じる部分を強く刺激され、あっというまに昇りつめてしまった。

「千夜子……我慢できない」

余韻で震えるわたしをうしろから抱きしめ、熱くて硬いものを押し付け、欲しいと訴えてくる。

「おまえは、我慢できるのか？」

「酷い……わかっててシタくせに」

「我慢して震える千夜子が可愛すぎて……抑えがきかないんだ」

囁きと共に耳元へかかる熱い吐息に震えてしまう。どうすればいいの？ 自分の実家の客用布団でえっちなんて恥ずかしすぎる！ そんなわたしの気持ちなどお構いなしに彼は準備を済ませ、わたしのジャージのズボンと下着を膝までずらす。そして、うしろから熱い楔を宛がい濡れた秘裂に擦り付けてきた。

「んんっ」

褌を掻き分け押し込まれても、いつものように最奥までは届かない。手前でゆつくりと擦られ、

思わず声上がりそうになるのをジャージの裾を噛んで堪えた。

「ああ、いい……千夜子のナカだ。今日ではできないと諦めていたんだ」

「やつ……そこ、ダメ」

そうされながら胸と濡れた秘所の前にある敏感な蕾を指の腹で擦られると、ひとたまりもなかった。

「くっ、締めるな……我慢できなくなるだろ？」

自分でもわかるほど強く彼自身を締め付けていた。いつもは散々焦らされた後は激しく攻められるのに、今日はこのままなの？ それこそこっちがおかしくなってしまう。ゆつくりとしたリズムで突き上げられているけれど、ソコじゃないとカラダが訴える。もつと……奥に欲しい。こんなにいやらしいカラダにされてしまった。もう彼としか生きていけない。彼だけなのだ、わたしのカラダをこんなにも愛してくれるのは……

彼のおかげでようやく少しずつ自分のカラダを好きになりはじめた。だからこうして感じることも食欲になれるのだ。彼が褒めてくれるから、彼が求めてくれるから——このカラダまでもが、愛しい。

胸が締め付けられるほどの切ない想いを感じた瞬間、一層彼を締め付けてしまった。

「くそっ、おまえがその気ならこっちだって……」

「んぐ、イっ……ちやう！」

彼が身体を反らせ、ズンと最奥まで押し込んだ途端、またイク。

「くそっ！」

「んぐっ、んんっー！」

イキ続けている間も激しく擦り突かれ、わたしは声を殺すのに精一杯で……そしてそのまま酸欠になり、意識を飛ばした。

「おい、ダメだ……まだ寝るな」

揺り起こそうとする声が聞こえたけれど、わたしはそのまま眠ってしまった。

翌朝、目覚めてから慌てて確認したけれど、わたしにも布団にも昨夜の行為の跡は残っていなかった。恭一郎さんがきちんと片付けてくれたみたい。

「ごめんなさい、わたし寝てました」

「いや、仕方ない。……ただし、帰ったら覚悟してもらうぞ」

と、にっこり笑って言われる。あれ……なにかした？ 心配してオロオロするわたしに彼は昨夜の顛末を聞かせてくれた。かなりお酒を呑んでた彼はあの時一緒にイケなくて、寝ているわたしに続きをすることもできずに朝まで悶々と過ごしたそうだ。

「こ、ごめんなさい」

「いや、おまえが寝落ちすることを想定しておくべきだった……俺もまだまだだな」

そう言っ、わたしを引き寄せて苦笑いする。

「俺も昨晚はおまえの両親に結婚を認めてもらえて、ほっとして酔いが回っていたからな」

昨日、彼は結婚だけでなく式を済ませる前に一緒に暮らすことも、わたしの両親に認めさせた。

『それで結婚式はどうするつもりかね？ 私どもとしてはデキたから結婚したという事態を避けて

もらえれば、あとは君達の好きにしてもらっていいと思っているんだ。最近は式を挙げない若い人達も増えてきているようだしね。ただ、親としては娘の花嫁衣装はぜひ見たいと思うが……君は再婚だし、晴れがましいことは避けたいのじゃないかね？』

父がいつもより慇懃な態度なのには驚いた。あとでお母さんから聞いた話では、いい男過ぎて隙がなくて身構えていたらしい。

『そんなことはありません。私も千夜子さんの花嫁姿が見たいですし、もちろん結婚式も披露宴もさせていたきたいです。実はすでに式場を仮押さえしてあって……来月イトコが結婚するのですが、四ヶ月後の大安に同じ会場でキャンセルが出たと聞いたもので』

『ほう。それは気が早いんじゃないか？ 反対されることを考えなかったのかね？』
少しだけ父の声音が厳しくなったのに周りの誰もが気付いていた。

『もちろん考えました……しかし、それで諦めるつもりは毛頭ありませんでしたから』
恭一郎さんも負けずに強い口調で言い返す。母もわたしもオロオロしてしまう。

『お義父さんの許可さえいただけたら、すぐにでも招待状の発送にかかりたいと思っています』

『なるほどね……千夜子、彼はずいぶん手回しがいいな。仕事もできるのか？』

『うん、営業部長補佐で、成績もいつも上位だよ』

父はただただ納得しているようだった。だけど彼はさらに畳み掛けた。

『ただ、式までの期間が短いので……離れていては準備が滞ってしまうのです。週末だけでは追

いつかないと思うので、彼女にはすぐにでも私のマンションに越してきてもらえればと考えています』

いやいや、すではぼ引越させているくせに……

『うちは3LDKで部屋も余っていますし、セキュリティも万全です。彼女のアパートは正直言って防犯設備が整っていないので、それも心配ですから』

確かにわたしのアパートは、会社に近いだけでセキュリティなんてものはろくにない。だって、太った女など誰が襲うかと気にしてなかったんだもの。それは両親からしてもかなり心配だったらしく、すぐさま引越してしまえと言われた。

『それと挙式の費用もこちらで持たせてください。再婚なのに大事なお嬢さんをいただくのですから、そのぐらいさせていただかないと心苦しいです』

『いや、それじゃ負担が大きすぎやしないかね？ これからの生活もあるだろうし』

『実は……学生時代から株や投資をやっていました。今住んでいるところは賃貸ですが、ローンなしで家建てられるぐらいは貯蓄もあります。子供ができたら千夜子さんと相談して家を建てることも考えていますので、どうかご安心ください』

その話にはわたしも目を丸くするしかなかった。株？ 投資？ 初めて聞くんだけど……

だって、普通のサラリーマンだね？ そういえば彼のクレジットカードってブラックだった。それを見た時は『チーフだからお給料をたくさんもらってるんだ』と思ったぐらいだけど、ローンなしで家を建てるって……そんなに持つてるの？

日曜の朝、わたしの実家から彼のマンションに戻るとすぐに、通帳や証書をいくつか見せてくれた。

わたしにはよくわからなかったけれど、通帳の残高が予想以上でものすごくびっくりした！

「だから引越しか、必要なものを買う費用は気にしないでいいから」

そう言っ、翌週にはわたしのアパートを引き払う準備をはじめてしまった。

「これでもう、おまえが帰る場所はなくなったからな。逃げるなよ？」

「に、逃げたりなんかしません！」

だけど、恭一郎さんが他の女性と結婚すると勘違いして連絡を一切断つて、逃げ回ったという前科があるため、なかなか信用してもらえなかった。わたしだって……ずっと一緒にいたい。アパートに帰る時は寂しくて堪らなかったのだ。ひとりで眠る夜がどれほど寂しいか、身に染みていたから。

「それじゃ、そろそろ出かけようか」

日曜は、午後から彼の実家へ向かった。

「まあまあ、可愛い方だこと。本当によかったわ、恭ちゃんが再婚する気になってくれて」

お義母さまにはすごく喜んでもらえたけれど、少しだけ心配なことがあった……前の奥さんと比べられたりしないか。かなりきれいな人だったというし、お見合いもお義母さまのほうに乗り気だったと聞いていた。

「わたしね、お料理を作るのも食べるのも大好きだから、つつい作り過ぎちゃうのよね。今日は張り切ってこしらえたの。だから、たくさん食べていただけると嬉しいわ」

「あ、ありがとうございます」

これを全部食べるのはちよつと……と怯^{ひる}んでしまうほど、テーブルの上は美味^{おい}いそうな料理のオンパレードだった。そういえば恭一郎さんが子供の頃太った原因のひとつに母親に甘やかされて育てられたことがあるって聞いてたけど。それには、こういう食事も入っていたのかな？

「母さん、気持ち嬉しいが、もう少し量とバランスつてものを考えて作れないかな。昔アキに少々注意されたら？」

アキさん、というのは恭一郎さんのイトコでモデルをしている朱希^{あき}那^なさんのことだ。わたしも一度会ったことがあるけれど、すごくきれいな人だ。

「あらいいじゃない、久しぶりなんだから。あなたがこの家にいる間は、ちゃんとアキちゃんの言いつけ通り身体にいいメニューを作ってたでしょう？ だけどあなたが家を出てからは、やつぱり自分が食べたいものを作りたくなったのよね」

おかげでまた太っちゃったわ、というお義母さまは少々ぼっちゃりしている。

「美味^{おい}しいです、これ。じゃがいものグラタンですよね？」

チーズとホワイトソースたっぷりのそれは、ホクホクしてとても美味^{おい}しかった。

「そうなの！ それでこっちは牛肉をじっくり煮込んだのよ。どうかしら？」
ビーフシチューっぽく見えるけれど、具は肉だけのようだ。

「すつこくコクがありますね。赤ワインが入ってるんですか？」

「あら、よくわかるのね。お料理は好き？」

「はい、食べるのも作るのも大好きです！ このところダイエットしていたので、作るのはそういうメニューばかりですけど」

「ダイエットメニューも工夫すれば美味^{おい}しくできるわよ。よかったらメニューを教えてあげる」

「うわあ、嬉しいです！」

「でも、あなたも我が家に来た時ぐらいいは、そんなのを気にせず美味^{おい}しいものを食べて帰ってね」

「あ、ありがとうございます」

嬉しいけど、あまり食べ過ぎると体重が戻ってしまいそうで怖い。そういえば昨日も実家で結構食べたけど、体重量^{たいりくりょう}の忘れた……

「よかったわ、ちゃんと食べてくれる子で。前の嫁はわたしの作ったものに一切箸^{はし}をつけなかったのよ？ 料理もしてるって聞いたことなかったし……なんであんな女と結婚したんだか」

「おい、おまえやめないか」

お義父さまが止めても、お義母さまのお喋^{しゃべ}りは止まらなかった。

「千夜子さんはぜんぜん違うからいいじゃない。ちゃんとそれを言っておいてあげないとねえ」

ずいぶんと独善的な考え方だけど、たしかに聞きたかったことではある。悪く思われていないよ
うだから、それでよしとしなきゃ。

「すまない、母さんに悪気はないんだが……小さい頃の俺は身体が弱くて食が細かったものだから、

食事に対する思い入れが強くてな」

「母親だから当たり前でしょ？ 自分ひとりで大きくなったみたいな顔してるけど、あなた達にも子供ができたらわかるわ。身体が弱くてヒヨロヒヨロであまり食べないあなたに少しでも食べてもらおうと、色々工夫して美味しいものを作ったものよ。喘息の発作が出て止まらない夜は一晚中椅子に座って抱っこして眠ったし、もっと酷くなった時は夜中に病院へ駆け込んで明け方まで点滴を受けさせたり。入院した時も、ぐずるあなたに一晚中付き添ったり……苦勞して育てたのに、ちつともわかつちやくれないんだわ」

「わかつてるから、母さん。おかげで今の俺はすっかり元気だよ」

「元気すぎるぐらいだと言いたかったけど、ここではそんなこと口に出せない。」

「ああ、おまえはよく頑張ったよ。私も仕事がある日は母さんに任せっぱなしだったからな」

お義父さまも宥めにかかる。

「感謝してるよ、母さん。ただ、元気になってからも食事を多めに作りすぎていたし、少し咳をしただけで学校や体育を休まされて……少々過保護すぎた時期もあったよな」

おかげで俺は肥満児だったという話になると、お義母さまは『あなたのためだったのよ』と笑って誤魔化していた。悪気はないんだ……憎めないけど、あまり深く考えずに話す方のように。

「アキが口出ししてくれなかったら、あのまま俺は変われずにいたかもな」

「そうそう、千夜子さん。デザートも用意してるのよ。わたしが作ったティラミス、食べてくだらない？ 息子も主人も甘いものはまったく食べてくれないから寂しくて」

恭一郎さんの前の奥さんが全然食べなかったという話を聞いた後では、食べざるを得なくて、すでにかなりの料理を平らげていたけど、デザートを断ることができなかった。すっかりご馳走になって……後で体重計に乗るのが怖い。

ティラミスを食べ終わる頃には、スカートのウエストが苦しくなってしまった。お化粧を直すついでにホックを外したほうがいいかなと思ひ、お手洗いに立った。けれど部屋を出てすぐに化粧ポーチを忘れたことに気が戻るうとしたら……ドア越しに、お義母さまの声が聞こえた。

「よかったわ、いい子で。また可南子さんみたいな人だったらどうしようかと思ってたのよ」

その時わたしは初めて、彼の元奥さんの名前を知った。カナコさんって言うんだ。

「おいおい、母さん。前の嫁の名前なんて出すもんじゃない。千夜子さんに聞かれたらどうする」

「だってホッとしたのよ。もう恭ちゃんは結婚しないんじゃないかって。アキちゃんと再婚してくれるかと思ってたのに、あの子はモデルのリユウキって人と結婚するんでしょ？」

「あれは違うって何度も言っただろ」

「アキちゃんならお嫁に来てもらっても申し分なかったのに……気心も知れてるし、あんたも子供の頃からアキちゃんアキちゃんって、べったりだったじゃない」

「やめろよ、昔の話は」

そんなに朱希那さんと仲がよかったんだ……同じイトコ同士でも、わたしとコータなんて、いくら仲がよくてそんなふうに言われたことはなかった。

「そういえば可南子さんはアキちゃんにだけは懐いてたわね？ 離婚したらいきなりモデルはじめ

たりして。あなた、利用されたんじゃない？」

「さあな、そうかもしれないな」

前の奥さんって今はモデルをやってるの？ 知らなかった……

「でも本当に可愛げがなかったのよね。なんでも勝手に決めてしまうし。結婚式のドレス選びも一緒にしたかったのに、全部自分で決めちゃって。そうだ！ 千夜子さんに、ドレス選びと一緒にさせてもらえないか聞いてちょうだいよ」

ええっ？ わたしは痩^やせたと言っても身長があるから、一般的な九号サイズは入らない。だから種類も少ないだろうし、どんなドレスにすればいいのか見当もつかないのに……どうしよう。優柔不断なところを見せてしまおう。

「母さんがいたら千夜子が気を遣うだろう？ 向こうのお義母さんも来たがってたし……かち合ったらどうするんだよ」

その言葉にホツとした。恭一郎さんはわたしの気持ちをわかってくれているんだ。

「口出ししたいわけじゃないのよ。うちは娘がいないから、ドレス選びしてるところを見ていたいだけなの！ アキちゃんのドレス選びが見たいと思って姉さんに聞いたら、あの子は懇^{こん}意^いにしてるデザイナーさんが一点物のドレスを用意してくれたからそういうのないんだって。写真見せてもらっただけど、ほんとに素敵なドレスよ！ アキちゃんはスタイルいいし、なんでも似合うのよねえ」

「頼むからアキと千夜子を比べたりするなよ。あいつはモデルだから、なに着ても似合って当然だ。

千夜子は、前に太ったことを気にしてるし、人と比較されるのが一番ダメなんだ。とにかく衣装合わせの件は俺が聞いてみるから、母さんからは言わないでくれ。彼女は母さんに言われたら断れないんだからな」

やっぱり比べられてしまうの？ 朱希那さんのドレス姿は、きつとすぐきれいだと思う。あんまり比べられたくないな……

「そうそう、来月のアキちゃんの結婚式の日はうちまで迎えに来てくれるの？」

「いや、千夜子も俺の婚約者として招待されてるから、俺達は別で行くよ」

「まあ千夜子さんも？ 気が早いね……でもいいわ。あなたがまた結婚したいって言ってくれたんだものね。このまま一生孫の顔が見られないかもって心配してたけど、大丈夫そうよね。あの子は健康そうで安産型の体型じゃない？ もう、今から楽しみだわ」

安産そうに見えるのね……こればかりは、産んでみないとわからないけど。

いつか、お義母さまに孫を抱かせてあげたいと思う。だってうちは兄のところに子供ができるかもしれないけど、恭一郎さんはひとりっ子なんだもの。

「ええっ？ ふ、増えてる……」

両家の実家巡りから帰ってきたその日、恐る恐る体重計に乗ったところ、予想してた以上に体重が増えてしまっていた。二キロ……美味^{おい}しいものって高カロリーで困る。

このところ引越準備だなんだと忙しくて、トレーニングもサボってるし。心なしかここ一

週間、会社の制服のウエストもきつく感じていた。

これって幸せ太りって言っているの？ それとも……リバウンド？

——結局わたしは増えてしまった体重のおかげで、衣装合わせの時に苦勞することになった。

恭一郎さんと一緒に衣装合わせに行った時に一着だけ着てみたところ、ファスナーが上がらなくですごく恥ずかしい思いをしたのだ。

こういう時は女同士ゆっくり見て候補を選ぶしかない、休日の今日はイッコを誘ってふたりで式場にやって来た。だけど……気に入ったドレスは胸のサイズが合わず、わたしが着るとムチムチした感じになってしまう。そして反対に胸に合わせるとウエストあたりがだぶつく。

「難なく入るドレスって、やたら太って見えるのね」

イッコの言うとおり、ウエストがすとしたエンパイアタイプだと、まるで妊婦に見える。プリンセスタイプでもサイズに余裕のあるものはフリルがやたら多くて、胸のボリュームがあり過ぎるわたしが着ると、横太りして見えてしまう。

二の腕も出したくないし、胸元も隠したい。脚ももちろんだし、背中も……隠したい場所はたくさんあるけれど、全部隠すわけにもいかない。

「やっぱりダイエットしなきゃダメかなあ……」

「もう、無理しないでよ？ チャーコは今のままで十分だと思うけどな。健康的で引き締まってて、出るところ出てるし。わたしなんか……」

そう言っただけイッコは悲しそうに自分の胸を押さえる。水太りタイプの彼女は、水抜きに近いダイエット法でスリムになった。今では少し華奢な感じがするぐらい。わたしは……どう頑張ってもそんな痩せ方はできなかった。骨太で筋肉質で背も高いため、華奢な感じには到底なれない。太ってる時からすれば今でも十分痩せているほうなのに、もっと痩せたいって思うのはどうして？ 朱希那さんと自分を比べるのは意味がないと思う。だけど、こんな近くにあれほど素敵な人がいると、比べられてしまう気がしてならなかった。それがわかって、彼もお義母さまに釘を刺していたんだろう。

「でもね、最近量るたびに体重が増えてるような……」

一〇二キロならすぐに戻ると安心してしまっていた。だけどあれからさらに二〇三キロ増えてしまった今、ちよつと焦りは始めている。

このところ食べる機会が多くて、トレーニングも忙しくてあまりできてなかった。だけど無理な食事制限はよくないってわかっている……。太っている時なら体重を落とすのは比較的簡単だけど、標準体重になった今、ここからどうやって落とせばいいの？ わたしはもう、どうしていいかわからずにいた。

3 過去からの襲撃？

「どうした？ 今日朝から元気がないな」

「だ、大丈夫です」

昨日は朱希那さんと龍騎さんの結婚式で、式と披露宴に恭一郎さんと招待されていた。

三十六歳の朱希那さんの結婚相手である龍騎さんは元モデルで、二十三歳の超美形の青年だ。

すごく素敵な式だったけど、モデル同士にしては地味というか普通だったように思う。親のための結婚式だからわざとそうしたんだと朱希那さんは言っていた。

ひと言で言うと、真面目な結婚式だったんだよね……同じく花嫁になる身としては一生に一度の晴れ舞台、できればもう少し華やかになりたいなあと思うわけで……。でも、同じ式場だからおそろく、似た雰囲気になりそう。それでも恭一郎さんが準備を進めてくれているのだから、なんとも言えない。わたしは示された選択肢から選び、衣装だけ決めればよかったから、楽といえば楽なんだけど……もう少し手伝いたいなって、ずっと思っているが言えずにいた。

「それじゃ、行こうか？」

「はい」

わたしは恭一郎さんにエスコートされて、パーティー会場へ入っていった。

今日はホテルで行われる、朱希那さんの事務所主催の結婚パーティーだった。

結婚式の二次会的なものかと思っただけで参加したら、とんでもない！ ホテルで行われる本格的なパーティー形式なもので、業界の人達がかかり集まっている……どうやら朱希那さんの書籍＆DVDの新装版のお披露目も兼ねているらしい。

そんなところに、どうしてわたし達が呼ばれたのか不思議だったけど、恭一郎さんと朱希那さんとはただのイトコ同士だと証明するためのようだった。以前、朱希那さんと龍騎さんの交際を世間に公表できなかった時期、恭一郎さんは朱希那さんの偽の恋人役を演じていたことがある。写真週刊誌にも出て話題になっていたから、それがフェイクだったと証明するために、彼とその婚約者であるわたしも一緒に招待されたみたい。

それにしても、会場のあまりにも華やかな雰囲気に戻込みしてしまう。

こんなところ、半年前のわたしだったら絶対に来てない！ きつと恥ずかしさだけで死ねると思う。だって、ほとんどがモデル業界の人達だよ？ すれ違う人はみなスタイルがよくて美しく、おまけに個性的でオーラがある人達ばかり。わずかに地味なスーツを着ている人もいるけれど、その人達はどうかやら会社のお偉いさんっぽい雰囲気だ。

わたしをエスコートしてくれている恭一郎さんも、いつもより仕立てのいい光沢のあるダークスーツに身を包んでいて、目を見張る格好よさだ。元々背も高く肩幅があつてスーツの似合う人だから、モデル達が集まる中でも見劣りしない。

そんな人の横にいるのがわたしでは……恭一郎さんに申し訳ないと思う。スタイルもよくない、

着ているものも似合っていない。この場所にいることが、居た堪れなかった。

昨日の式と披露宴の時は、きっちりしたフォーマルなワンピースにジャケットを合わせていったけど、今日はなにを着て行けばいいのかわからなくて、お世話になってる結婚式のブライダルコーディネーターの工藤さんにお願いで、式場のレンタル衣装から見繕ってもらった。

脚も出したいくない二の腕も出したいと言わしたしの意思を汲んで選んでくれたのは、裾がアシシメトリーで膝からふくらはぎくらいまで丈のあるドレスだった。胸が強調されそうなので、ビスチェタイプは避けてもらったんだけど……逆に胸元が縦に深くカットされたものになってしまい、恥ずかしいぐらいだった。そこさえ目を瞑れば縦長のラインで体型がきれいに見える。

『このドレスが似合う人って、かえっていいんですよ。万人に似合う可愛い膝丈のドレスは、たぶん業界の人達の中では浮くと思うんです。大人っぽくてセクシー系のドレスのほうが、目立たないと思います。この丈だって、千夜子さんぐらいの背がないと似合わないですし』

そうおだてられて選んだ。色はベージュピンクで地味というかヌーディな感じ。セクシーだけど、見ようによつては派手にも見える。

『サイズの関係で、どうしてもお胸が強調されてしまいますけど』

言われたとおり完全に谷間が強調されちゃってる！　こんなに胸元の開いた服を着るのは初めてで、恭一郎さんも気に入らないのか、ムツとした顔で工藤さんに詰め寄っていた。

『他にないのか？』

『千夜子さんはお顔が可愛らしくていらつしやるので、上品なエロ可愛さがあって、これが一番似

合つてらつしやると思いますよ』

確かに他のも着てみたけど、無難なものは太つて見えた。結局それに決めたけど、肩が出てしまうのでストールをつけてもらった。こうして着たこともないようなセクシーなドレスを身にまとい、わたしはこのパーティーに参加したのだった。

わたし達は会場の人混みを縫って朱希那さん達を探し、祝福の声をかけ近寄る。

「アキ、昨日に引き続き大変だな」

「恭ちゃん、千夜子さんも！　今日も来てくれてありがとうね」

朱希那さんは今日もすぐきれいだった。彼女を気に入っているデザイナーさんが昨日と今日のドレスを提供してくれたそうで、どちらも見たこともないほど複雑なラインと重ねられた布地のドレープが美しかった。昨日のドレスのテーマは荘厳で、今日のは妖艶だそうだ。昨日は親族が見ても目を剥かない程度の露出で上品さがあつたけど、今日は露出がすごく、デザインも斬新だった。全体は白地で、胸元は黒のレースで飾られている。身体の線がはつきりと出るようシェイプされていて、身体に巻き付くようなスカートは前から見れば超ミニで、うしろから見るとロングのドレープ。さすがモデルさんだけあって、立つただけでかっこいい！

「朱希那さん、昨日のドレスもきれいでしたけど、今日のドレスもすごく素敵です！」

「ありがとう、千夜子さんも素敵よ。でも……よくそんなドレスを着るの、恭ちゃんが赦したわね。今日のパーティーのお客さんの中には軽い奴らがたくさん交じっているから狙われないように、で

きるだけ恭ちゃんから離れないようにしてね」

え？ どういう意味だろう……こういうの着ちやいけなかったの？

「その時は速攻で帰るぞ」

「ごめんごめん、そんな神経尖らせないでよ。あいかわらず彼女のことになると鶏冠立てるの早いんだから」

そっか、恭一郎さんが気に入らないってことか。いつも以上にムスツとしてるものね。取引先やうちの親の前で見せてる営業スマイルの顔とは違い、身内相手だと基本無理に笑わない彼。わたしという時だつてしょっちゅう笑つてるわけじゃないけど、だからこそたまに破顔するとドキツとしてしまうのだ。

「アキさん、出版社の人が話したいって」

「わかった、それじゃ千夜子さんも楽しんでいてね」

うわあ、龍騎さんもいつも以上にキマってる。昨日は白のフロックコートタイプのタキシードだつたけど、今日はダークグレーのスリーピースで正装って感じ。去り際にニコツて笑つた顔は年相応で可愛い。

「他の男にそんな顔して笑つてるとこ見ると、腹が立つな」

恭一郎さん、なんだかちよつと怖い顔してて、少し嫌な予感……

「え？ だつて笑いかけられたら返しますよ。特に龍騎さんのあの笑顔はレアでしょ？ 普段は懐かない猫か黒豹くみひょうって感じなのに、朱希那さんとかわたし達にはああやって素っばいところ見せて

くれるから、つい……わたし、そんなに笑つてました？」

「ああ、蕩うちやうけそうな顔してたから癪しゃくに障さむつた……お仕置きだな」

そう言つて会場の外の柱の陰に押し込まれ、キスされてしまった。

「んっ、やあ」

すぐに舌が入り込んで絡め取られる。頬ほおに宛あてがわれた手が耳を掠かすめるたび、腰に回された手が背中をなぞるたびに腰が砕けそうになってしまう。もう、こんなところでダメなのに！ お願いだから感じさせないで……必死になつて彼を押しつけて、ようやく解放される。

「ダメ、もう……ほら、口紅付いちゃったじゃない」

バッグからハンカチを出して彼の口元を拭ぬぐう。普段は薄い色しか付けないけれど、今日はパーテイーなので少しだけ濃い色。グロスもたっぷり塗っているから取れたらすぐにわかってしまう。

「取れついでだ」

そう言つてもう一度貪むさふさられた。ようやく唇を離してもらつた後、わたしは荒い呼吸が収まるのを待つてから化粧室に駆け込んだ。

「ふうっ……」

化粧室の鏡の前にして大きなため息をつく。出入りしてくる女性は背も高くきれいな人ばかり。近くに寄られると気後きおくれしてしまう。メイクもばっちりで、目元のインパクトも半端ない。近くで見れば見るほど、それがわかる。だけど、いつまでも引き籠こもつていてもしょうがない。口紅とグロ

スを塗り直して化粧室を出た。

「ねえ、君。どこの事務所？」

すると、背の高い男の人がいきなり話しかけてきた。今、どこの事務所って言うてたよね？ この会社から答えられるんだけど……どう考えても自分のことではないだろうと思い、そのまま避けて通りすぎようとしたら進路を阻まれた。

「君に聞いたんだけど？」

「えっ？ わたし……ですか？」

うしろを振り返っても誰もいない。前に向き直ると、いきなり壁のほうに追い込まれた。

なんか……見たことあるような、ないような顔。外国人みたいに整った面立ちで薄い瞳の色をしている。その彼の顔が傾けられ、金色の長い髪がわたしのほうへサラリと落ちてくる……

すごい、これって本物の金髪？ こんなきれいな髪を初めて間近で見ってしまった。

「なんで逃げるの？ 僕のこと知らない？」

知らないと言いたかったけれど声が出なかった。だって、これって壁ドン？ 知らない人にされるなんて思わないじゃない。なんか怖い……。今いるのは化粧室を出てすぐのところなので、恭一郎さんの姿は見えない。

「まあ、いいや。携帯の番号教えてよ。SNSのアカウントでもいいし」

そう言ってスマホを取り出すけど、なんのためにわたしのアドレスを聞いてくるのかわからない。

「あの、人違いとか？」

「なんで？ 君みたいなタイプが好みだから声かけてるんだけど？ 柔らかそうで……美味しそうだね。清纯っぽいのに妙に色気があって……グラビアやってるんじゃないの？」

「ち、違います！ グラビアなんてとんでもない！ 花嫁の身内の……連れです」

グラビアって……胸の開いた服を着てるから間違われたのかな？ やっぱりこんなドレス……着て来るべきじゃなかったんだ。

「アキナの身内？ へえ、そうなんだ。ぼくは龍騎のモデル仲間で……」

「千夜子っ！」

恭一郎さんの低い声がしたと同時に目の前にあった顔が引き離された。そしてすぐさまわたしは、間に割って入った彼の腕の中に引き込まれる。

「なにやってるんだ？ 君、俺の妻になにか？」

つ、妻！ 頭の上で聞こえた言葉に仰天する。ま、まだ妻じゃないよね？

「なんで？ この子、指輪してないじゃん」

指輪？ あ、そっか……結婚してたら左手の薬指に指輪をはめてるものね。わたし達は婚約したけれど、まだ指輪は買いに行ってなかった。

「あんたは確かアキナのイトコの……ふうん、残念」

ひとり納得顔の彼は、去り際にウインクして会場へと戻っていった。

「なに俺以外の男に壁ドンされてんだよ」

「な、なんででしょう？」

困惑して聞き返すと、思いつきり呆^{あき}れられた。まさかグラビアアイドルと勘違^{かんちが}いされたなんて言えない。場違いな似合いもしないドレスを着てきたことを後悔しても、もう遅い。やだな、すぐにでも帰りたい……いい気になって、こんな場所に紛^{まぎ}れ込んだ自分が惨^{みじ}めだ。

「おまえな、俺がどれほど……ああ、もういい。帰るぞ」

「えっ？ 帰るの？」

わたしが帰りたいって思ってたのがわかったの？ それとも恭一郎さんに恥^はずかしい思いをさせてしまったから、これ以上ここにいたくないとか？ なんだかどん自分の身の置き所がないような気がしてきた。

「あ、でも帰る前に朱希那さんに挨拶^{あいさつ}ぐらいしておかないと」

「……そうだな」

やっぱり……ムスツとしてる。だからといって、朱希那さんになにも言わずに帰るのは失礼だ。

朱希那さんは、写真週刊誌の一件で迷惑をかけたことをずっと気にしているようで、あれから何度かメールをもらった。この間は『ドレス見る？』と誘われて、恭一郎さん抜きで会ったりもした。思ってた以上に気さくな彼女は、普段からすごくナチュラルな雰囲気だった。こんな素敵なイトコが側にいたら恭一郎さんの女性を見る目も肥^こえるよね？ だから前の奥さんもきれいな人を選んだのかな……

恭一郎さんの実家へ行った翌週、会社で芸能情報に詳しい野村^{のむら}さんにそれとなく聞いてみた。

『カナコ』という名前のモデルがいるかどうかを。彼女はすぐに調べてくれてネットに公開されて

いる写真とプロフィールを見せてもらった。本名は島津^{しまづ}可南子^{かなこ}。彼女は朱希那さんとはまったくタイプの違うキツイ目元の美人で——すごくスレンダーな人だった。

「おい、アキ。俺達はもう帰るぞ」

会場に戻ると朱希那さん達はすぐに見つかった。

「なにかありましたか？」

龍騎さんも心配してくれてる。あんまり表情を変えない人だけど、それがよくわかる。たぶん、そういうところが恭一郎さんと似てるかな？

「こいつ、トイレに行って帰ってくる間に変なのにつかかって……ほれ、あそこにいる金髪^{きんぱ}の口ン毛^{くちげ}、ハーフ顔のやつ」

「クリスのことかしら？ 悪い子じゃないんだけど、強引なところあるから。千夜子さん、ごめんなさいね」

朱希那さんは代わりに謝るわと言ってくれたけど、別になにか酷^{ひど}いことをされたわけでもないのに申し訳なかった。

「千夜子さん、あいつの好みのタイプだよ。モデルの女は味気ないって、いつも言ってる」

みんな細くてきれいなのに？ そんなふうと思う人もいるんだ。感心していると、うしろでザワザワと騒ぐ声が聞こえ、その声に皆が一斉に振り返った。

「朱希那さん、ご結婚おめでとございます！」

花束を抱えた、やけに細くてきつい顔をした美人がそこにいた。にこやかに微笑^{ほほえ}んでいるようで

目が笑ってなくて少し怖い。あれ？ この人、もしかして……

「可南子……」

やっぱり恭一郎さんの前の奥さんだ。きれい……だけど細すぎて今にも折れそう。筋肉のない細さって、こんな感じかもしれない。

「あなたは招待してなかったはずだけど？」

「一言、お祝いを言いたくて。花束もほら」

可南子さんはすごくにこやかに話してるけど、酷く一方的だ。話を聞いてないって感じ。

「恭一郎さん、お久しぶり。逢えて嬉しいわ！ なに、その女……まさかそのおデブな子が、あなたの相手だとか言わないわよね？」

「俺の妻だ！ 失礼なことを言うのはやめてもらおう」

おデブ——確かに彼女からすれば太いとは思う。だけど昔のわたしとは違うはずなのに……衆目の中で浴びせられたその言葉は深く胸に突き刺さり、わたしは呼吸を乱し身動きできなくなってしまう。皆がわたしをそんな目で見ていると思うと耐えられない。

「千夜子、大丈夫か？」

倒れそうになるのを恭一郎さんが抱きかかえて支えてくれた。

「そんな子を選んだら、きつとデブな子しか生まれてこないわよ……って！ なにするのよ！」

見れば朱希那さんが、持っていたグラスの中身を彼女に浴びせていた。濡れた髪が顔に貼り付いて、今の可南子さんは悪鬼のように見える。

「相変わらずの非常識っぷりね！ 今さら出てきたところで、あなたの出番はないわ。さつさと帰りなさい！」

朱希那さんは、わたしのために怒ってくれてるんだ……

「どうして？ どう見たってその女よりわたしのほうがきれいでしょ？ わたしのほうが恭一郎さんにふさわしいのに」

「可南子っ、いい加減にしろ！ これ以上、彼女を侮辱するのは赦さんぞ！ おまえとやり直すなんてありえない、結婚したこと自体間違いだっただからな！」

恭一郎さんも声を荒らげて彼女の暴言を止めようとしてくれていた。

「今日わたしがここに来たのは、恭一郎さんに会うためでもあるのよ？ どうして喜んでくれないの？ ああ、前にあなたの子供を生まないって言ったのをまだ気にしてるのかしら？」

やめて、あなたが子供のことを言わないで！ 恭一郎さんには、わたしがいる……彼の手を握り締めると、少しだけ笑いながら握り返してくれた。もう大丈夫なのかな？ 傷付いてない？

「まったく話を聞いてないようね。それとも不都合なことは聞こえないふり？ おかしいんじゃないの……まさか、クスリとかやってるんじゃないでしょうね？」

「や、やってないわよ！ そんなものっ！」

朱希那さんのその言葉に周りの人達は疑いの目を向ける。冷たい視線が可南子さんに浴びせられた。濃い化粧でわかりにくいけれど、肌にはハリもツヤもなにもなかった。顔だけじゃなく腕や首筋も……

「くっ」

周りを睨みつけて彼女は出口へ向かっていく。すると周囲のざわめきがほっとしたものに変わった。朱希那さんが気丈な声で来客に非礼を詫びているのが聞こえる。

わたしは……まだ足に力が入らない状態で恭一郎さんの腕の中で震えていただけ……

「千夜子、すまない……まさか、あいつがおまえにあんなこと言うなんて」

恭一郎さんもすまなそうに謝ってくれた。彼のほうが泣きそうな顔をしている。自分のせいだと思ってるんだ……でも、そうじゃない。悪いのは彼女だ。

「ごめんなさい、千夜子さん。嫌な思いをさせて」

「いえ、そんな……朱希那さんこそ、せっかくのお祝いの場なのに。氣遣ってくださいなさってありがとうございます」

思ったよりもダメージを受けていて……そう返すのが精一杯だった。

「千夜子、帰ろう」

これ以上ここにはいたくない……

わたしがこの場にふさわしくないと、恭一郎さんの隣に釣り合わない、誰かが言っているような気がしてならなかった。

4 愛のお仕置き？

彼のマンションに着いても、わたしは黙りこくったままだった。

帰りの車内、恭一郎さんもほとんど話しかけてこなかった。部屋に入ってもふたり並んでソファに座り身体を寄せ合っているだけ。

「すまない、辛い思いをさせてしまったな。まさかあんなふうに言ってくるなんて……もう二度と関わり合うことはないと思ったのに」

氣遣う彼の言葉に、ただ首を横に振ることしかできなかった。そんなわたしを抱きしめたまま彼は優しく頭を撫でてくれた。

「あいつの言ったことなんか気にするな」

「恭一郎さんは……大丈夫ですか？」

「ああ、俺は大丈夫だ。おまえがいてくれるからな。しかし千夜子にあんな酷いことを言うなんて……本当にすまなかった。前以上に会話が通じないぶっ飛びように呆れたよ」

恭一郎さんの元カノや元妻のことは、今までできるだけ気にしないようにしてきた。それがまさか、あんな人だったなんて。わたしにも初恋の人や学生時代好きだった人がいるけど、その人がもしあんなふうに変わってしまっていたら辛いよね……見たくないと思う。